

発表者名：篠塚 規

所 属：オブベースメディカ

抄録タイトル：

在宅酸素療法（HOT=Home Oxygen Therapy）―自由な”旅” へのニューディバイス―

【はじめに】

COPD（慢性閉塞症）などで常時酸素吸入を要する患者は約 13 万人ほどいる。

国内旅行は、酸素供給会社が、夜間用のコンセントレーターと外出用ボンベをホテルに前もって手配しておくことが可能であるが、海外旅行に関してはいくつかの理由でまったく盛んではない。

（国内手配と同様の手配をしたケース 3 例）

<ケース 1>

A さん 72 歳、女性。“片肺摘出後”で在宅酸素療法中。

若い頃留学した米国コロラド州デンバーに家族で訪問し、夫である元医学部内科教授より依頼されました。日本の航空会社での酸素手配、米国国内便での手配、そしてホテルは、オフィスのリスト上の 1 社を選出し、滞在中の酸素濃縮と移動用のポータブル酸素を手配しました。何のトラブルもなく帰国。

<ケース 2>

B さん 79 歳、男性。“COPD”で 15 年程在宅酸素療法中。

生きている間に一度スイスを訪れたいとのことで、在宅酸素供給会社の担当者を通しての依頼でした。参加する団体ツアーで利用するスイスの航空会社での機内酸素を手配。列車とバスでの移動の多いツアーでしたが、スイスの酸素供給会社にホテル毎に次の移動用のポータブル酸素と夜間吸入用を設置してもらい、空ボンベをホテルに置いていく方法で手配し、何のトラブルもなく帰国しました。

<ケース 3>

C さん 82 歳、男性。カンヌ映画祭への受賞旅行

外務省の職員を通しての依頼でした。日本の航空会社の酸素手配は当方のアドバイスで所属事務所が主治医を通して行いました。ただしフランス国内は 9/11 同時多発テロ以降、酸素ボンベは“テロ用の武器”とみなす法律改正があり、フランスの医師の処方ではしか手配が出来なくなったため、フランス旅行医学会会長 E. Caumes 先生を通じてニース大学の呼吸器内科教授に患者紹介をする形でホテルでの酸素濃縮機とポータブル酸素を手配しました。何のトラブルもなく帰国。

（新しいポータブルコンセントレーター）

液体酸素ボンベ（親機と外出用子機）

親機を家庭に備え、外出用には親機の専用ノズルから外出用の子機に液体酸素を移してしようします。ポータブル圧縮酸素ボンベよりも小型軽量のため、米国では、これを肩からかけゴルフを楽しむ患者や長距離サイクリングを楽しむアクティブな患者もいます。

アメリカ・カナダでは広く普及し、米国では 1,706、カナダでは 93、メキシコとカリブ海では 29、ヨーロッパでは 39 の都市で事前手配すればレンタルサービスが受けられます。

Inogen One や Oxlife などの数種類の機種がありますが、いずれも小型軽量（例：Inogen One は約 30cm×15cm×30cm で約 5kg）で 100V～240V の電源や 12V の自動車電源にも対応、酸素流量は 3L/分から 5L/分分の機種まであります。

このポータブル酸素濃縮機は、事前に申請することで、米国のほぼすべての航空会社、エールフランス、ルフトハンザ、カンタス、ヴァージンアトランティック、全日空などの航空会社が機内への持込を認めています。米国でのレンタル料は予備バッテリーの本数が増えるにつれて高くなりますが 1 週間 2 万～4 万円位です。

【結論】

前述した新しいポータブルコンセントレーターではラスベガス、ハワイ、グアムなどに手配をしたが患者さんは何のトラブルもなく、医療手配の煩雑さも軽減された。

在宅酸素両方の患者さんの旅行を活性化するには旅の相談窓口になる旅行会社が正しい知識を持つことが必要であり、そのためには公正中立であるべき旅行業者団体が正しい旅行医学に基づく勉強会や研修会を定期的に行うことが望ましい。また旅行手配は旅行会社が行い、医療手配は医療手配専門会社が行うグローバルスタンダードの普及が不可欠である。